
天然教師。

蝶々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然教師。

【Nコード】

N6347K

【作者名】

蝶々

【あらすじ】

町立咲里中学校。

一年担任の逢沢、啓上、佐野、副担の佐伯、三好、小牧が生徒のために奔走する！

・・・筈ですが。

いつの間にやら激甘ラブコメディ！？

こんなんでも恋愛って成り立つんです。

着火したら鎮火せよ

高らかにチャイムが鳴った。

茶色く分厚い板にグレイの鉄の足がついたなんとなく懐かしさ漂う椅子がガッグオーと地響きのような地鳴りのような音を立てる。

「礼」

「「「ありがとうございます」」」

その言葉を号砲に、ざわざわと教室中で反響する。

あいざわ
「逢沢センセ！」

横から声が飛ぶ。

いつもの声。

「んー？」

逢沢、と呼ばれた教師は振り返った。

振り返ろうとした。

振り返ったはずだった。

振り返ることが出来たはずだった。

そんな文法的活用を使う羽目になったのは、先ほど名を呼んだはずの生徒が全身総当たりタツクルをかまして来たせいだった。

かまされたとはいえ、教師とはいえ、女とはいえ。

やられっぱなしなわけではない。

教卓があり、しかも黒板の高さの関係で上がり框かまちの半分くらいある横二、三メートルほどの長方形の台、つまり教壇の上。

教卓と壁にはさまれるかのように置かれた教壇のその上で。

壁から教卓まで約五十センチ。

そんな幅狭さで。

タツクル生徒をヒュ、とかわして生徒の背中側へ。

「つとりやあ」

そのまま生徒を後ろから抱きとめる。

「捕獲成功！」

ざわめきつつも慎重に見守っていた女生徒が歡喜に沸きあがる。

「キヤッ」

「ミキティー男前よおおッ」

女子の間で拍手喝采。

「てめえそれでも教師かッ!？」

タツクル男子が驚くわけでもなくただ喚く。^{わめ}

「残念ながら教師だッ!」

右のこめかみにデコピンを入れた。

とりあえず彼を手放す逢沢。

そのあとはもう説教説教の熱帯低気圧が一気に五個ぐらい来た剣幕で叫ぶのみである。

「あんた毎度毎度あたしの授業の度^{たんび}に全身タツクルかましてんじゃないわよッ!」

「いいじゃねーか別に!」

「よかないわッ! 年上だぞ、敬意くらい持たんか!」

「あんたに敬意とか持てるか!」

「持てる持てないじゃなく持て!」

ギヤーギヤーと毎時間繰り返す言葉がこれしかない逢沢も逢沢である。

もちろんこの二人に廊下からのどっしどっしという闊歩^{かつぽ}の音が聞こえている筈がない。

「毎日毎日あたしの英語終わってすぐを狙ってんじゃないわよ」

「じゃあほかにいつ狙うんだよ」

「狙わんでいいんだよちったあ学習しろ!」

果たして女教師はどっちなのか。

そのとき、ダアアンと教室中の窓ガラスが振動でピシピシとヒビいりそうなほどの勢いかつ腕力で扉を開かれた。

「逢沢先生も学習しろ!!!! 何故そうも叫ぶ必要性があるッ!」

その先にいたのは。

「・・・け、啓上先生けいじょうせん・・・」

五歳年上の先輩教師だった。

「確かに毎度タツクルかます湊川みなとがわも悪いが、毎度大声で叱る逢沢先生も学習出来てないッ!!」

「う」

「う」

二人同時に言葉に詰まる。

「職員室まで乱闘の一部始終が聞こえているのを理解しそれでもという判断か!？」

「う」

啓上先生の声も相当です。

なのに毎度止めに入るあなたの言葉がいつも正論・・・。
逢沢は思った。

＊

町立咲里さきやち中学校。

小さな限りなく田舎に近い小さな町。

でもすぐそばの街には大きなショッピングセンターがいくつも立ち並び都会の、田舎とも都会とも言い難いところ。

そんな小さな町にただ一つの中学校。

生徒数は二百人前後。

三学年それぞれ約三十人二クラス程度。

大体が小学校からの持ち上がり組で、中には幼稚園から、果ては産婦人科の頃からという生徒もいる。

そんな中学校の一年A組。

担任であり英語担当“火種係”である逢沢観月あいざわみつき、通称ミキティー。
観月先生から観月ティーチャー、そしてミキティーに簡略化された次第である。

そのお隣一年B組担任数学担当“鎮火係”ちんかの啓上篤けいじょうあつし、通称上司。

逢沢は知らないが、百七十五センチある逢沢と同じ身長であることを最近密かに気にしだしている。

しかも逢沢が若干踵かかとのある靴を履くので生徒の間ではもっぱらの噂になっている。

要するに全然密かではない。

「逢沢先生」

生徒を帰した夕暮れの職員室。

定期テスト前でクラブ中止になり、ある程度で引き上げてきたところの声掛けだった。

「あ、佐野先生・・・」

マグカップ片手に逢沢の肩を叩いたのは啓上と同期の佐野である。

校内唯一のC組担任理科担当、佐野さの古都子、通称こっちゃん。

「まあた湊川だった？」

「そうなんです・・・もうあいつ毎回毎回タツクルですよ」

「まあいいじゃないの」

「よかねえだろ佐野先生」

女二人の語らいに首を突っ込んだのは、ほかでもない啓上である。

「職員室まで大絶叫だぞ。なんの雄叫びだっと思うだろ普通」
う。

逢沢の心に刺さる。

ざっくりとピンク色のハート型を貫通。

「・・・コーヒー・・・二杯目貰ってきます・・・」

逢沢はよろけながら席を立った。

ライムグリーンで色づいたリーフ柄のマグカップを忘れずに机から持ち出す。

「でも、逢沢先生いつも湊川のこと“捕獲”してるじゃない」

ねえ、と逢沢本人には聞こえていないフォローをする。

ん、と若干険しい顔をする啓上。

というか難しい顔をする。

「あれ、教壇から湊川を落とさないためでしょう？」

いくら十センチ弱とはいえ、全力で突っ走ってきた湊川がそこから落ちることは容易に想像できる。

だから怖いのだ。

もし頭から落ちて打ちどころが悪かったら。

もし骨折でもしたら。

もしなにかの拍子に机の角にでもぶついたら。

「Aの綾瀬^{あやせ}が言うには、逢沢先生敬意がどうか言ってるみたいだけど、多分照れくさいんでしょうね」

「照れくさがってたらいつか事故になるぞ」

そこできつい口調になる啓上。

「そうだけど、副担の一年間とこの一ヶ月の彼女見てたら大体の性格ぐらい掴めるでしょう？」

「・・・」

ふつと顔から険しさが消える。

「逢沢先生、ものすごい照れ屋じゃないですか。確かに言わないとエスカレートします、それは教師としての弱点というか欠点になります。ですが」

カップのコーヒーに一口つける。

「逢沢先生の湊川を守る本心に気付けよ湊川、と一年生に向かって言う方が難しくて無理なんですか？」

ん？　ともう一口つける。

彼女の二つ名は“フォロー係”。

その名がつくほどの大人数を、特に啓上を言いくるめてきた。

「・・・時間かかりそうだなあ、湊川だと」

はあ、と机の下のカゴに数缶置いてあった缶コーヒーの一つに手をつけた。

えっそんな急展開ですか

バムッ。

なんか変な音を立ててミニバンのドアが閉まる。

夜八時半、逢沢はやつと帰宅した。

マンションの一室。

「ただいま」

そう言っても、返事はない。

「今日はグラタンかなあ」

自室に入り、こと、と結構重量のあるカバンを机に載せる。

中学校教師は忙しい。

定期考査・・・いわば中間テストを控えると、もっと遅くなる。

実際、これでも遅いほうである。

現段階で逢沢は基本自宅に持って帰るタイプだが、分割授業なんかをしている二・三年になると話は変わってくる。

ークラスを半分に分けるとそれぞれで担任が違ってくるわけだから、当然授業進行に若干のずれが生じる。

当の逢沢も、教師数の関係で三年も同時に受け持っており、このずれやテスト問題作成の加減で持ち帰るに持ち帰れず、学校に残る羽目になっている。

「グッグラターン」

あー、とグラタンの用意を始めた。

そして二十分後。

ドアがガチャガチャとわめいた。

玄関ドアで誰かが鍵をいじっている。

「・・・」

特に反応を示さない逢沢。

とりあえずグラタンに没頭している。

そして。

がじゃつと古めかしい音を立てて開いたドアの先にいたのは、他でもない、啓上だった。

*

「お帰り」

キッチンから顔を出す。

「おう、ただいま」

ばこばことせわしく靴を脱ぐ。

「観月、お前机にルーズリーフ忘れてただろ」

ほれ、とキッチンテーブルに置かれたのは格子模様のスケルトンでモノトーンなファイル。

「あ・・・ごめん、ありがと。気付かなかった」

「中身はテスト対策用の問題の原本と解答だろ、馬鹿ぐさ。」

左胸の赤いなにかに矢印が刺さる。

結構痛い。

逢沢はくつと胸を押さえる。

「家でまで怒らないで篤・・・・・・・・」

グラタンをオープンにのせながらうねうねと波打つ滝のような涙を流す。

「見つけたのは佐野先生だ。またお礼言っとけ」

はあい、と反省しつつ微笑んだ。

「風呂沸いてるか」

「うん。さっき沸いたところ」

「先入る」

「どーぞー」

ジジジと怪しげな音を立てるオープンと向き合いながら、うわの空で返事する。

一年生最初の定期テストにしては難しすぎるだろうか。

逢沢は思案する。

というか先ほどからそれにとり憑かれたと言っても過言ではないほどに思案していた。

生徒たちの多少のレベルや自宅勉強の様子は掴めたものの、どこまで出題範囲にしていいいかわからない。

教師になってから一年と少し、今までに担当していたのは二年生などある程度経験を積んだ子たちだった。

基礎やリスニングはともかく、応用の長文や会話文は出しづらい。出すことで彼らのためにはなるが、一方で難しすぎてやる気が消えてしまわないか不安。

一度消えたら、再燃させるのは難しい。

出来ないことはない。

だけど、消えてしまうということが怖い。

見えないところに腕を突っ込むような感覚になる。

新米教師なら、それぐらいいしななければならないような気がする。

だけど、テストを受けるのは彼らであって。

自分の成長のためにテストを作るわけでも、自分の出世のために彼らにテストを受けさせるわけでもない。

だから思案していた。

簡単にすることが果たして彼らのやる気の向上に繋がるのか。

難しくすることが果たして彼らのためになるのか。

いい匂いがしてきた。

上に乗せたチーズがいい具合にとろけだしている。

後ろで啓上が風呂をあがり始めた音で、逢沢はグラタンを出した。

*

逢沢観月、二十三歳。

教師歴一年と一ヶ月。

啓上篤、二十九歳。

教師歴六年と一ヶ月。

リピートするが、七年ではなく六年。

昼間は怒号飛び散る付き合いだが、夜は違っていた。

帰宅先は同じ。

決して通い妻とか半同棲とかではない。

要するに、そういうことだった。

*

「観月」

食事後。

啓上に試作のテスト問題を見せていた。

テ対用ルーズリーフの方とは違い、手を加えずだとそのまま実際のテスト問題になる。

「はい」

「ちよつと簡単すぎないか？」

「やっぱりそう来た。」

「長文がない。せめて五文から八文くらいの対話文は入れたほうが
いいような気がする。詳しいことは教科が違うからあまり口出しで
きんが」

「やっぱり思うよね・・・」

「うう、と頭を抱える。」

「この大問四を三にして、大問三は削除して、新しく設置した大問
四は教科書とかからか自作かの会話か対話文を作ったらどうだ」

「やっぱり同じこと考えるね・・・」

あたしのことよくわかってるこの人。

逢沢はさらに悩ましくなる。

しかもちゃんと口出ししてくれている。

「ちよつとその案取り入れていい？ 試作してみる」

「どうぞ」

足早にリビング端のデスクトップの元へと歩み寄り、立ち上げる。
むーん、と起動音が低音で聞こえる。

「篤イー、篤はテストできたあ？」

「いや、最終の大問十二が迷ってる。お前だったら、最後は文章が
応用計算かどっちがいい」

んー、と立ち上がるまでの数十秒考える。

「十一はなに？」

「簡単な文章だ」

「じゃあ応用かなあ」

ころころ、とキャスターを転がして座る。

ちなみにデスクトップパソコンは逢沢用。

啓上用ノートパソコンは寝室の向かいの部屋、啓上の自室にある。

「よし、あいつら泣くなあ」

そんな安易に決めていいのか篤。

「あたしの案使うの？」

「お前が一番生徒に近いからな」

「・・・それって」

「年齢がな」

嘘だ。

それは嘘だ。

きつとこいつ知ってやがる。

あたしがこないだ隠れて篤の作った去年度末の二年の数学テスト解
いたら三十二点だったの知ってるんだ。

「いや、あいつらと比べるのはむしろ努力してるあいつらに失礼か」

「えっそれってあたし努力してないふうに聞こえる」

「数学において努力という意味だ」

一言多い。

っていか何言も多い！！

「ひっど、それってあたしが馬鹿だってことじゃない。篤のばーか
あ」

ぶーい、とそっぽを向く。

「いいもーん、佐野先生にけちゃんけちゃんに言ってもらうんだから」

「げ、ちよつと待て佐野先生ってそれは」

「メールしょ。佐野先生、なにか言われたらメールするのよって言ってくれたもーん、言うたびに一つ篤の恥ずかしい過去を暴露してくれるって。もう昨日一つ聞いたよ。篤が数学で一足す二を」

「わかったごめんもう言わないからお前も一回黙れ　　っ!」

だーっと一人わめく啓上を片目に、逢沢は微笑んだ。

「女ってこえー・・・」

「今さら??　佐野先生なんて女の中の女、女の集大成じゃん」

「なんでも知ってるな、あの先生は・・・」

ふう、と今度は啓上が頭を抱える。

立ち上がったデスクトップで、プリント類の作成ソフトを立ち上げる。

「じゃあ、ちよつとやってみる」

USBメモリから引っ張り出し、元の問題案に修正をかけていく。

*

はとがパッポー、パッポーと四十分過ぎたことを知らせるアラームが啓上の脳内に響く。

「出来た」

啓上自身もパソコンでの作業中。

テストの訂正や例の大問十二をいじっている最中に、遠くで声が聞こえた。

たすたすと廊下を通り、リビングに入った。

デスクトップの前やフローリングに散乱するように置かれた教科書やワーク類。

それを端に寄せつつこれどう、と画面を見せる。

顔を画面と逢沢に近づけて一言。

「いいんじゃないか」

よし。

逢沢は心の中でリンボードダンスする。

何故リンボーかはあえて触れない。

「よし」

声にも出す。

ふと時計を見上げると、十一時あと三分。

日付が変わる瞬間に近かった。

「じゃあ、寝よ」

ふうあああ、と眠そうに口を開ける逢沢。

「寝ろ寝ろ」

ぼんぽんと背中を叩く。

くるくる回る椅子の上で、逢沢は船を漕ぎかけていた。

「ほら、ここで寝るな。風邪引くぞ」

「んー・・・」

「んーじゃなくて、ほら、観月」

「むーん」

そううめいてぐぐぐーっと横に倒れる。

逢沢の右にいた啓上に、うまい具合にもたれる。

「・・・観月・・・」

怒るに怒れない。

よくこいつはこうなる。

あまり夜更かしできないタイプだ。

よ、ととりあえず首元とひざ裏に手を突っ込み、持ち上げる。

「んんー・・・」

眉を一瞬ひそめ、またすぐ安眠状態。

「・・・」

あえて無言で寝室まで運ぶ。

やっぱり風呂はメシの前にさせといてよかった。

啓上は思った。

こいつ、さつきまでスカートだったし。

どき、と起きないようにベッドに沈める。

布団をかけてやると、んーむ、とまたうめいた。

子供みたいな女。

最初出逢ったときは思った。

まあ、六歳も下ならそう思っても仕方ないかもしれないが。

「・・・・・・・・」

す、と彼女の横に腰掛ける。

ぎゅい、とベッドが傾く。

「んん・・・・・・・・」

寝顔が可愛くて仕方ない。

うめきながら笑うのがガキっぽい反面、素直さがあって。

たまに、俺の名を呼ぶことが、嬉しくて仕方ない。

俺が、こいつの心の片隅にすることが嬉しくて。

時々、湊川がうらやましくて仕方ない。

素直にこいつを先生として慕う気持ちを、素直にとまでは行かなく

ても観月にぶつけていることが。

なにも言わなくてもなんの理由もなく、こいつのそばにいられ

る彼らの権限が、うらやましくて。

同棲をし始めて半年。

いまだ純粹すぎる彼女とのキス以上の壁を越えられない俺を、観月

はどう思っているのだろうか。

『半年も一緒に一つ屋根の下で暮らして、キス越えられんてあんた

どんだけ臆病なのよ』

ここ数年、すべてを見てきた佐野先生についてこの間言われたことだ

った。

臆病。

確かにそうだと思う。

むしろ自覚がある。

怖い。

こいつを、壊してしまうかもしれない。

こいつに、拒絶されるかもしれない。

それが、怖かった。

半年もの間、手を出せないほどに。

テスト前日のさざ波

「観月センス」

ぶに、と横からつつかれる。

「あつ佐野先生！」

圧力のかかった頬を押さえつつ、逢沢は振り返った。

「昨日はありがとうございました、あのルーズリーフ・・・」

「いいわよ。あいつが帰るの遅かったことにむしろ感謝するときなさい」

ふふ、と寛容な佐野は微笑みを返す。

「っていうか最近はずわざと遅めにしてるみたいだしねえ」

「え？」

初耳。

「どーしてですかッ!？」

「どーしてかしらねえ」

にやにやとものすごく嬉しそうに笑む。

「さつてと。職朝よ、すっかりでボケボケで天然培養な逢沢先生」
がし、と肩を捕まえられて逃げられない。

「てっ天然培養ってにやんれすか!？」

「・・・そういうところよ・・・」

いい加減げんなりしたように佐野は囁いた。

*

遠目で、二人を見つめる男が二人。

「仲睦まじいですね、あの二人」

「ある種の親子だな」

「やっぱりお母さんは佐野先生ですか」

「逢沢先生がお母さんだったら世界中の全年齢の女性が母になれる

よ」

「いつもながら辛辣な言い方ですね啓上先生」

「褒め言葉をありがとう三好先生^{みよし}」

「これ以外にあなたを褒める言葉はないですからね」

・・・。

皮肉五倍返し。

ちなみに当社比三・七倍。

「まあいいや。さて、職朝ですよ、啓上先生」

職朝とは職員の朝の打ち合わせ会議のことである。

時間割変更や配布プリントなどについての詳細が報告される。

「なにか報告等がありますか」

いつもどおりの会議。

終了時刻もいつもと同じ。

今頃生徒は朝読書中だ。

一年と二年の前半は、朝のSHRまでは読書をするようになっていく。

二年の後半からは全学年総復習のワークだ。

あ、と教頭が思い出したように言う。

「また不審者の多発する時期ですので、またプリントは配布します
が注意を促しておいてください」

そう。

そういえばそうだった。

五月から夏場にかけて、暖かさによる開放感と身軽な夏服に変わるため、この時期よく不審者が多発する。

「今年はまだ報告がありませんが、これからの季節注意が必要です
から」

そう言って教頭は締めた。

*

「はいおはよー」

がららら、とA組の引き戸を開けるはもちろん逢沢。

きりーつ、と日直の立川^{たちかわ}がユルク声をかける。

着席後、朝SHR。

「時間割変更はありません。もうテスト期間も大詰めだから気を引き締めて」

メモ用紙を見つめつつ生徒たちを見つめつつ。

三十九人のかける二個の瞳が私を見つめてくれる。

可愛くて仕方ない。

「これから不審者多発の時期だから、なるべく誰かと大人数で帰るように」

移動用の教科書カゴを見つめて、あ、と紐綴じの四角く重厚感のあるものを取り出す。

「あと立川、日誌取りに来なかっただろ」

ほら、と手渡す。

逢沢はこういうところ甘い。

啓上でも、生徒に自分で職員室まで取りに行かせている。

「すみません、でも佐野先生と熱く抱擁されてると入れる職員室にも入れないです」

ぶぶ、と吹き出したのは他でもない湊川。

そしてプラスアルファというか他の生徒全員。

「ミキティー、ついにそっちに走りましたか」

「走ってないわー!!」

ぎゃいのぎゃいのとまたいつものように叫ぶ。

「湊川、てめー今日の英語覚悟しろ、いっちばん難しい問題お前当てる」

「いいもーん、沢井^{さわい}が教えてくれるから」

なー沢井、と隣の女子に声がけ。

そんな沢井がとどめの毒牙。

「湊川、ファイトッ」

「え、見捨てるの俺を!？」
いつもにぎやかな一年A組。
楽しいなあ可愛いなあと笑顔が溢れない日はない。
この辺で止めといてやるか。
じゃー終わりまーす、と逢沢は無理矢理打ち切った。

*

逢沢の相棒、1A副担は家庭科担当佐伯^{さえき}である。
啓上よりいくつか上で、もう三十は半ば。

「逢沢先生、気付きましたか」

二時間目の終了のチャイムが鳴り響いてしばらくの職員室。
1Aから帰ってきた佐伯の開口一番。

顔は生徒に悟られないよう普通だが、声色は明らかに深刻。

ポーカーフェイスの佐伯ならではの上級技だった。

「ええ」

なんのことはもうわかっていた。

逢沢は続ける。

「あいつ黙ってましたけど、湊川、体調悪いですね」

悪そう、ではない。

今のSHRで気付いて確信した。

「本人どこるかお母さんからはなにも聞いてないから、恐らく内緒
にしているんでしょうね」

「テスト、明日からだし」

ちよっと心配そうに髪をかき上げる。

「っていうか、テストはともかく倒れちゃったら怖いですね。素直
に保健室に行ってくれないでしょうし」

「頭打たれるとやっぱり怖いよね」

佐伯もやはり同じ教師、考えることは皆同じである。

「今日は体育ありますし・・・どうしよう、やっぱり武本先生に言

った方がいいかな」

「そうだね・・・いや、言わないほうがいいんじゃないかな」
返事は予想外だった。

「え？」

どうして、と問い詰める前に佐伯は口を開いた。

「黙ってるってことは、心配させたくないかあるいは他になにか言えない事情があるか」

「あたしに言えないほどのなにながあるって言うんですかッ！」

「どうしましたか逢沢先生」

大声に反応して啓上が動く。

「口喧嘩でしたら外でどうぞ」

「違います」

あっさりと切り返す。

「でも気が散るので外でどうぞ」

「いえ、もう話は終わりました。すみませんでした」

淡々と棒口調。

そして逢沢は佐伯に向き直ってスパンと言い放った。

「わかりました、この話は誰にも言わないでおきます」

「了解しました、僕も黙っておきます」

まるで本当になにもなかったかのように、あっさりと話を終えた。

なにながあるっていうのよ。

逢沢は心で反芻していた。

どーしていつもあたしに突っかけては重要なことは言えないのよ。

どつきは出来るのにどうして体調悪いって一言が言えないのよ。
頼れない？

そんなに信用できない？

心の中で自問する。

自答は、ないまま。

その時、ドアが開いた。

ノックもないまま開いた。

職員室のドアはわりと静かに開くが、それでも気付いた。そこにいたのが、1 A保健委員、綾瀬だったからだった。

「ミキティー、湊川が・・・!!」

こっちゃんの秘密と上司のお説教と

保健室の扉を静かに、でも落ち着かない空気で開けた。

「ああ、逢沢先生」

にこ、と保健医が微笑む。

「ちょうど連絡しようと思っていたんですが・・・綾瀬さんは速いですね」

「あ、あの・・・湊川は・・・」

入り口で突っ立ったまま、逢沢は切羽詰まる。

「大丈夫ですよ。教室で倒れたらしいですが、頭も打たず、木造の床で崩れるような体勢でへにやへなって倒れたみたいですし」

「え、えと・・・」

「心配ありません。微熱です」

今は奥で寝てます、とさらに言う。

保健医つてすごい。

聞きたいことを、訊かずにわかってくれている。

「一応寝かせておきますが、もしひどくなるようでしたらご連絡します」

閉じられたカーテンの向こう。

規則的な息遣いが、逢沢を安心の涙に変えた。

*

「啓上先生」

声をかけたのは、佐伯。

「・・・なんですか」

わかりやすいほどの地の底から這い登ってきた声に屈することなく佐伯は続ける。

「ずいぶんお怒りですね」

「当然だ」

「なにに対して怒ってらっしゃいます？」

「こ、と年上のはずの佐伯が下手に出た口調。」

「・・・」

「逢沢先生が湊川を止めなかったことですか？ それ以前に逢沢先生が湊川の不調に気付かなかったことですか？」

カマをかけられているのは啓上にもわかっていた。

ただ、そう思っていたのは冷静な脳だけで、憤怒状態の口は裏腹。

「違う」

「じゃあ、なにがでしょう？」

変わらない笑顔のまま、佐伯は腹が立つほどクエスチョンを重ねる。

「逢沢先生が他の誰にも話を持ちかけず、誰も湊川を守れなかったことだ」

「守ってほしいとは彼、言いませんでしたか」

「言わなくても守るのが教師であり大人の努めでしょう！？」

「それは単なる職権乱用ですよ啓上先生」

「乱用なんかしてない、義務だ」

「考え方が僕より古くてどうするんですか、先生」

「古くない、正当だ」

「正当も度が過ぎるとストーカーですよ」

「それは極端な発想過ぎでしょう、俺はそこまで言ってます」

「啓上先生」

急に話を区切る。

それまでが連射乱射だった分、その間が奇妙なほど息苦しかった。

「じゃあ、根本的な話をしましょう。湊川が何故言わなかったのか」

「それは、」

それは。

啓上は頭の中を探し回った。

答えは、

「・・・・・・・・」

まさか。

「明日はテストですね、先生。そういえば、一学期最初の間は大切だって言ったの、啓上先生でしたね」

あ、そうそう、とさらに続く。

「逢沢先生は気付いてらっしゃいましたよ。今朝はタックルしてこなかったってものすごく悲愴でした」

「・・・佐伯先生」

「ちなみに倒れたとき、そばには綾瀬と森下がいましたね。綾瀬はすぐ逢沢先生のところへ走りましたし、森下もすぐ保健の岸本先生を呼びに行っていました。ああ、あと立川が彼を運ぶのに担架手伝ってくれて身近な僕を呼んでくれました」

そして、微笑んだ。

「改めて、なにに怒ってらっしゃいます？」

*

職員室の給湯スペース。

マグカップ片手に言い争いというか佐伯先生のお説教を耳に入れつつ、佐野はパソコンを軽いタッチで叩いていた。

あつたま堅いわねあのカタブツ。

まあ、カタブツなら頭堅いのは当然か。

そんな意味不明な考えしか回らないほど、佐野の頭はあることで侵食されていた。

それは・・・。

「さーてと」

横の席についたのは三好である。

壁に背を向けるようにずらりと横並びに六席ある。

教頭及び生徒指導が座るセンターから、A組担任副担、B組、C組と並んでおり、B組副担である三好と隣なのはまあ当然なのだが。年の近い三好が横に座られると、若干の緊張を強いられる。

「佐野先生、あの二人、いい勝負してますね」

「ええ、まあ正統派カタブツと頭の回転速い人の対決ですからね。両極にいるあの二人に喧嘩させたらそりゃいい勝負ですよ」

ま、圧倒的に啓上が劣勢ですけど、と引きつり笑い。

「そりゃ、カタブツは勝てないでしょ」

「ですよええ」

にこにこと笑う三好とは正反対のぴくぴくとこめかみが疼く微笑み。

「そういえば三好先生」

「なんですか」

「明日の数学、監督三好先生ですよ」

三好は国語担当である。

しかし実際の数学担当啓上は、三クラスの質問受付に回るため、その間不正等の監視をするのは他教科担当の教師である。

「ああ、A組三限は俺だよ」

「多分明日は湊川、保健室受験すると思います」

「了解、詳しいことは明日聞くよ」

にこにこと事務的な伝言だけ残す。

四限が終わった。

高らかに鳴るチャイムとともに、生徒とおいしい給食を食べるために教室へと向かった。

緊張する。

あの男はそんなオーラを持っている。

というか、勝手に緊張しているだけなのか。

頬がカツとなる。

あの男といると、どうも流される。

自分が貫けない。

渡り廊下を突き抜け、階段を上る。

ちらほらと当番用の白エプロンをつけた生徒達が流れてゆく。

一部の生徒から、佐野は美人として崇め奉られているのを知ってい

た。

ちらちらと行き交う視線もそれである。

長い髪をなびかせ、颯爽と歩く姿はある意味注目の的である。

自分の芯を持ち、強く、流されない。

そんな彼女の弱点を、一体誰が知りえようか。

ちやかちやかとプラスチックの容器に箸が当たる。

今日はご飯に味噌汁に鶏肉のさっぱり煮、インゲンとコーンのサラダだった。

大好評さっぱり煮はいつも残らないが、ご飯については運動部に入った食べ盛り男女中心に胃袋に収めてくれていた。

いつも給食の調理の方に褒められるのも、彼らの功劳の賜物。ガチで腹減ったーという食欲本能剥き出しの男子と、食べなきゃ調理の方に悪いというありがたい考えの女子の利害一致の連携体制だった。

てんこ盛り盛られた男子のご飯の量には、エベレストもしくは富士山を思わせるなにかがあった。

佐野自身はもともと並量しか食べないので、普通盛りである。

ちなみに並と普通は彼らの中では意味合いが違っらしく、並の方が普通盛りより少ない。

当然である。

彼らの普通はあくまでも富士山だ。

佐野の言うところの普通盛りとは佐野の考える普通盛りで、要するに並盛りであるわけだが。

「うっわ、こっちゃんいつもどおりすつくねえな！　ウサギか？　佐野ウサギ！？」

ひらがなとカタカナ多用の言葉が意地悪だ。

「あんたらが食べすぎなのよ。あんたら富士山でしょ」

「エベレストだよ、世界最高峰だよ」

「いやチヨモランマだろ」

こいつら気づいてねえな。

ふとブラックこっちゃんがほくそえむ。

「エベレストだと思う奴ー！ 挙手！」

ほいほーい、と数名が手を挙げる。

「じゃあチヨモランマ！」

へーい、とまた何人かが手を挙げる。

多数の女子が手を挙げない。

賢い子達だ。

今日小牧先生が教えたはずだろうに。

社会一年の範囲である地理で。

くすくすと笑い出す女子に、手を挙げた男子が猛反論。

「なに笑ってんだよ！ 馬鹿なこと言ってると思ってんのかよ、俺らはご飯の盛り具合に命懸けてんだぞ」

懸けるな給食のご飯の盛り方くらいで。

むしろ富士山盛りの方が綺麗だと思うが。

「あんたたちバツカじゃないの、チヨモランマってどこにあんのか知ってんの！？」

「アメリカ」

根本的に馬鹿だ。

「じゃあエベレストってどこにあんのよ」

「イギリス」

こいつら知ってる国だけ挙げてるな。

あの小さな島国に、連立するようにエベレストが立つと思うのか。

っていうかアメリカにあるのはアパラチア山脈とロッキーマウンテン山脈だよ。

それ以前にお前ら、

「伊瀬」

先ほどからアメリカだのと意見し続けている男子に声をかける。

「なに、こっちゃん先生」

「尾崎、お前は偉い」

いきなり女子を褒める。

「なんなんだよその軽く呼んでスルーって」

「いや、エベレストもチヨモランマも一緒だから」

「はぁ？」

こっちゃんが馬鹿になったぞと数名の男子が笑う。

「じゃーなんで名前ちげえの？」

説明してみるよと馬鹿にしたように笑う。

理科担当を舐めるな。

伊達に地層の勉強してねーんだよ。

好きこそものの上手なれだよ。

ハートボイスが荒くなる。

「方言とか言語の違いよ。冷麺と冷やし中華の違いと同じってところかしら」

ほうほうと女子がうなづく。

「関西の方では冷麺って言うらしいわ。私たちは中華の方だけど」

「冷コーとアイスコーヒーの違いと一緒？」

向こうの方から声が聞こえる。

むぐむぐとさっぱり煮を口から流し込んで指を立てる。

「まあそんなとこだけど、最近はあるまり関西でも冷コーとは言わないわね。マクドナルドとかでもアイスコーヒーって注文するし。マックとマクドなら同じ意味ね」

おー、と謎の歓声上がる。

話が横道にそれた。

「というわけで、さっきの挙手はどちらも同じ意味でしたーってことで」

ね、と三好先生の前でのとは違う微笑みを投げた。

皆妙に納得した表情で各々の給食にとりかかった。

BGMには、最近のJ・POPがゆったりと流れている。

逢沢の万有引力

お昼過ぎ。

やっぱり早退するらしい湊川の手伝いに、逢沢は保健室を訪ねた。

「湊川」

そつと声をかけると、重い腰をあげるように返事があった。

「おう」

「気分は？」

「・・・う」

ギユイ、と軋む音。

唸ってる？

そんなに悪いのか？

「入るぞ」

啓上のような口調で彼をはため隠すカーテンを開ける。

「つて寝てる」

急激にトーンが下がる。

湊川はまだ純白の布団にくるまっていた。

「湊川、湊川」

ごそごそと揺する。

「・・・キ」

「えっ」

掴まれた腕。

あり得ないほど強い握力。

その握力と相反するような温かい体。

熱を差し引いても、やわらかい温もり。

「み、などが」

また、言葉。

「逢沢先生」

止まったかと思った。

時間。

心臓。

なにもかも。

いつもは、呼ばないじゃない。

ミキティーとか、逢沢センセとか。

まともにあたしのこと呼んだことないじゃない。

なんで、

「寝惚けながらなら言えるのよッ」

語尾はどう考えても荒いのに。

弱々しくなる口調。

嬉しい？

違う。

悔しい。

湊川があたしを先生として見てくれてるってことを信じられなかったことが。

「ッて離しなさいよコノヤロ」

ハッ和我にかえり、奴の不釣り合いなことこの上ないゴツい胸板を押す。

「ッ 離しなさいよテメこら」

グーイグーイ押しても、びくともしない。

いい加減暑苦しい。

「ッて起きてんでしょッ！」

ちよつと、とんとんたたたく。

動かない。

ていうか、たたくたびに力、強くなってるような気が。

「湊川！」

「・・・み、き」

「ちよつと名前で」

呼ぶな。

言えなかった。

「観月」

篤？

違った。

もつと。

もつと高い、変声期特有のビブラートというか震えの効いた声。耳元で聞こえる奴の声。

ヒュ、と息遣いが聞こえたと思った瞬間。

「つてわあああああつ」

ザ・大絶叫。

グン、と肩を押される逢沢。

「やかましーッ！！」

双方真っ赤になりながら叫ぶ。

「ミキティーなにやってんだ俺の使用巾着でええ！？」

「お前がそれを言うかこの抱きつき魔あつ！」

「言いがかりつけてんじゃねエ夜這い痴女！！」

「ハア！？」

痴女お！？

なにが痴女だあ！？

「はい、帰ろつか湊川君」

割り込んだ声の主は当然保健医。

「ほーい」

すいっとかわされる。

言葉を、まるでパンチのように。

「逢沢先生も行かれます？」

「・・・はい」

うつむいて答えた。

*

車で家まで帰り、着替えてから時期的には少し暑いような気もする毛布に潜る。

はぁ、と肺を動かすと、一氣にいろいろ思い出してくる。なんで俺、あんなこと言っちゃったんだろ。

本人の前で。

先生の名前。

苦しい。

言わないように、我慢してたのに。

言えないように、我慢してたのに。

熱に浮かされて、口をついた。

『観月』

きれいな名前。

それを、禁じられたはずの口で呟いた。

心に住む人の名前を。

*

職員室に行くには、必ず保健室の前を通る必要がある。

「離しなさいよ teme くら」

そんな声が、耳に届いた。

「み・・・」

「観月」

聞こえた声。

自分が言うよりも早く耳に飛び込んできたその声に、聞き覚えはあった。

ただ、内容には覚えはなかった。

戸惑い。

壊したくないたった一人の愛しい女。

それと呼ぶ声が風になって俺に吹きすさぶ。

なにかに打たれるというのは、こういうことか、と納得する余裕もない。

その直後の断末魔にも似た雄叫びが、動揺を無理やり終息に向かわせる。

そんな中、かつかつとヒール音がクレッシエンドする。

保健室の女主人である。

「あら、じょう・・・啓上先生」

なにしたらっしやるんです、としどろもどろに言う。

危うく裏で使用されている彼の愛称を口走るところだったのだろう。

「あ、いえ、なにも」

「湊川君、早退するんです。それですか？」

「いや、俺はこれで」

啓上は逃げるように職員室に走った。

中ではまだ痴女だのとのたまわっている。

この世には信じたくないことがある。

俺は知ってしまった。

知りたくなかったこと。

気付いていること。

気付いていたこと。

俺は知ってしまった。

湊川。

知っていた。

いつからか気付いていた。

ずいぶん前から気付いていた。

知っていたはずだった。

湊川の恋愛事情。

タツクル。

毎日かますそれは、照れ隠し。

ふざけて逢沢の名前を呼ぶ理由。

普通に照れ隠し。

体調不良を申告しなかった理由。

心配させたくなかったから。

みつともない、カッコ悪い面を見せたくなかったから。

佐伯先生に言われなくても違った面で理解していたはずなのに。

知っていたはずだったのに。

自分の中でごまかしていた。

認めたくなかった。

俺一人であいつを独占したい。

教師ではない、素のままの、ありのままのあいつを。

そんな想いに、横やりを入れるやつがいる。

それが、よりにもよって、

「教え子だと・・・？」

年の差。

そんな問題じゃない。

湊川の恋愛を否定するわけじゃない。

湊川の先生に対する恋心を蹴飛ばすつもりもない。

俺の身勝手なわがままであいつを押し込めるなんてあり得ない。
だけど。

湊川だって気付いてるはずだ。

あいつが、湊川の心中を知ること、

「傷付くなり悲しむなりすることくらい」

可愛かったはずの教え子が、自分に恋心を抱いていた。

そして、観月自身は、その想いに応えられない。

俺がいるからじゃない。

あいつ自身の中にある、教師としての固定観念がそうさせる。

俺とは教師期間よりも前からこうだったからそんなこともないが。

「啓上先生」

逢沢よりも前から知り合いの声。

「おう」

「ずいぶんお悩みのようね」

「そう見えるか」

「見えるし、キーボード打つ手は止まってるし、なによりあんたからだだ漏れの負のオーラに皆びびってるわよ。あたしに後始末押しつけないみたいね」

あーやだやだ、と肩をあげる。

それに反応したかしないか、数人の先生方がギクッないしドキッと一時停止する。

コーヒーを一口。

今、佐野が持ってきた栄養ドリンクだ。

果たしてコーヒーに栄養があるのかはさておき。

「元気出さないよ。らしくないわよ」

そしてボソツと一言。

「湊川の恋心ぐらいで」

ブバブアゴフツ!!!

「知ってたのか!？」

「ずいぶん前から噂だったわよ。綾瀬とか生徒の間だけで」

教職員の間はそうでもなかったけど、と微笑ましそうに言う。

「ただ、どこまで本気だったかは知らないけどね」

おりゃ、と軽い肘鉄。

「いだだだだッ」

軽くない。

軽くないぞこれはッ!!

「あんた、負けるつもり？　そこまでの男？」

だとしたら、とだめ押しのようなどめ。

「その程度しか思ってたってことかな？」

試されるように微笑まれると、この女の勝ちが決まったようなものだ。

啓上は内心闘争心につきそうな火を根性でもみ消す。

「誰も、譲るなんか言ってるねえだろ」

「うん、譲るとは言ってる。負けるなとは言ったけどね」

どこまでも屁理屈をこねやがってこの女。

＊

啓上はなんとか立ち直った。

ある意味では開き直ったと言っべきか。

佐野は、ほ、と一息ついた。

この男がしばむなんてあの子の力は絶大ね。

酒盛りは男前な彼氏と

「佐野せーんせ」

隣人がピュイツと口笛を吹く。

「・・・なんでしょう」

「テスト明けたら、付き合っていただけませんか」

「どこへ？」

佐野は即答。

違う意味では取ろうとしない。

しかし“めげない負けなドンを押せ”がモットーの三好も引こうとはしない。

「デートへ」

「性格が湾曲かつ常識から逸脱してる三好先生とはお付き合いしてさし上げられませんわ」

「・・・」

返す言葉もない。

「テスト明けにデートなんて言ってられませんか。テストの採点及び成績評価、それに生徒たちのように私たちにもクラブがありますし」

「俺のパソコン部は休みなんですよね、それが」

「私たちの女子テニス部はテスト明けにもかかわらず試合が土日と詰まっていますの」

ちなみに今日は水曜日である。

テストは二日間あり、明けるのは金曜になる。

「じゃあ夜は」

「友人とデートです」

「そのお友達も可愛いですか？」

「デートと申し上げておりますわ」

「でも彼氏とも言いませんでしたよね」

「では言い直しましょう、彼氏とデートです」

「僕に見込みはないですか？」

「当面の見込みはございませんわ」

「いつかはあつてことでしょうか」

「失礼、永遠にございませんわ」

「じゃあ、その彼氏は僕よりかつこいいと？」

「ええ、性格が湾曲かつ常識はずれで軟派な三好先生と比べるのは失礼なほどかつこよくて清純で男前な人ですわ」

「じゃあ一度会ってみたいですね」

「あら、もう何度も顔をあわせてらっしゃるじゃないですか」

「・・・・・・・・え？」

「もう数え切れないほどお会いになってらっしゃいますよ。あとでご紹介しましょう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

今日も佐野の圧勝である。

「あ、逢沢先生」

「あー佐野先生ー」

疲れましたあ、とイスを二人で半分こしながら座る。

逢沢と佐野とは席が三つ離れているので、よくこうして喋っている。

「湊川、明日どうかしら」

「わからないですけど、頑張つて来てやるこのやろーとか弱々しく叫んでましたよ」

「そう・・・どちらにしても保健室受験になるわね」

「ええ」

逢沢は眉間にしわを寄せる。

「初めての中間は、皆で受けて欲しかったんですけどね・・・」

「あら、なんで？ 揃わないのは嫌だった？」

いえ、そうじゃなくて。

ほつぺたをわかりにくい程度に紅潮させる。

「初めてって、皆緊張するんですよね。だけど、誰か仲間がいて、皆が真剣に鉛筆打ち鳴らしてたらやらなきゃって勇気出てきませんか？」

あたし昔はそうだったんですけど・・・と今度は真っ赤になる。

「・・・そっか、でも、仕方ないわね。明日の状態で判断しましょう」

ん、とさも思い出したように話のコンパスの指針を変える。

「逢沢先生、“My goddess” 予約できましたよ」

「わっほんとですか!？」

うれしーッと黄色い声。

むしろ金色というべきか。

「土曜日の夜ですよ。何時からですか？」

「なんと八時から! あのレストラン、予約ないと入れないからねーッ」

「がんばりましょーね、佐野センセ!」

「めいっぱいオシャレしてね逢沢先生」

イエー、とハイタッチ。

「あ、いいですねー綺麗どこ二人、今度一年生の先生達で飲み会しません？」

そう言ってきたのは小牧だ。

「あ、いいですねえ、私、カクテルバーでいいとこ知ってますよ」

「居酒屋なら僕お勧めが」

カクテル大好き佐野と日本酒焼酎なんでも来いの佐伯が口出し。

「とりあえず先生方、テストですよッ! 学校現場で酒の話はしないでくださいッ」

カタブツ啓上が上司らしく説教。

「・・・はぁーい」

そして口を尖らせる四人。

「もう堅いんだから啓上先生、カクテルはお嫌い？」

「もうちょっと柔らかい脳じゃないと、焼酎を舐めてはいけませ

んよ。飲むもんですよ」

「ほんと、堅すぎて石になっちゃいますよ」
そして逢沢のオチ。

「あたしなんて柔らかすぎて怒られてますし」
一同大爆笑。

変にツボに入った四人。

「ハイツも面白いから机にむかっってくださいっ」
おりゃおりゃと四人の腰を押す。
だれが学年主任かもはや謎である。

ちなみにこの酒盛りの話に一年B組副担任が入らなかった理由も
う明確である。

*

「失礼します、逢沢先生いらっしゃいますか」
職員室から声が聞こえた。

放課後。

酒盛り話で盛り上がった数分後である。

「ん？・・・どうした？」

テスト期間中は職員室入室禁止のため、教師が入り口まで向かう。
生徒用入り口が後ろのため、逢沢が一番遠い。

教師用入り口から一旦廊下へ出た。

「あのねミキティー、ここ教えて欲しいんだけど・・・」
指したのはちょうど明日のヤマにしようと思っていた箇所である。
まあそれを言うわけにはいかないが、教えはしないと。

「ここは、ほら、be動詞があつて、疑問文だとAre youだ
けど、この下線部を聞いてるって事は、コレは」

「“なに”を聞いてるんだよね」
「そそ」

「それってWhat? それともWhere?」
なるほど。

「混ざってるんでしょ」

「そーなのー」

生徒がうなだれるように言う。

「それはね・・・」

「あ、ミキティー捕まえたあッ」

廊下の向こうから聞こえる。

逢沢のクラスなかの林と中井である。

「ここ教えて!」

「コレ謎なの、解説読んでもさっぱり」

「あーッミキティー!!!」

さらに酒井、箱本、関田。

「発見んんッ!」

「ここ教えてえ!」

「助けてヘルプ!」

「あーミキティー捕獲!」

「いたいた!」

・・・。

三十分後、最終下校時刻。

「・・・ほれ、皆もう時間だ、家帰りなさい」

「ミキティー、明日の朝一番にミキティーのこと襲うから」

「足洗って待ってて!」

「朝はコーヒー牛乳飲んでね!」

「愛してるよ観月ちゃん」

いろいろおかしいとは思ったものの、逢沢はあえて突っ込まなかった。

生徒達が消えてから。

「観月」

声が聞こえる。

「あ、篤・・・」

にか、と笑ってみせる。

「足じゃなくて顔だろ、むしろ」

「・・・あたし、朝は野菜ジュース派なんだよね・・・」

ふー、と息をつく。

息するのが久しぶりのような感覚。

「そろそろ下で一年会議だ。行くぞ」

「はい」

学校現場で下の名前では呼ばない。

そう決めた啓上が破ったことを、逢沢は不審にも思わなかった。

*

「観月」

家での篤は優しい。

なにかって・・・。

「お前、なんかあったか」

ない。

毎日、訊いてくれる。

声が聞けて嬉しいのもあるけど、なんか愛されてるなあと思ってし

まう。

佐野先生はそれを言うと、

『痒い痒い痒い痒い』

の連弾連呼だけど。

逢沢は毎日の質問にいつものように「ないよ」と答える。

いつも優しい篤、今日は違った。

「篤は？」

「気が気じゃなかった」

「えっなにが!？」

気になる。

急に好奇心旺盛になる逢沢。

「教えてッ」

「お前、ほんとになんもなかったのか？」

うん、と素直にうなづく。

「・・・じゃあ、俺の気が気じゃなかったこともなんでもなかったことになるな」

「どしてっ!？」

本気で啓上の左腕を引っ張る。

「お前がみなッ・・・」

「え？」

みな？ と引っ掛かる。

「あ、いやな、んでもない」

変に途切れ途切れな啓上。

「湊川？」

ねえ、と指を絡めとる。

「湊川って言った？」

確かにあいつは、と言葉を紡ぐ。

「成績しんぱ」

「そうじゃない!!」

時間が止まったみたいだった。

叫んだのは、篤が叫んだのなんて。

「な、に・・・」

「お前が平気でも、お前は平気でも」

バンッ!!

壁が揺れた。

壁についたこぶしがぎりぎり握られている。

「篤、手が」

「俺は嫌なんだよ観月!!」

静まり返った部屋に、かすれた声。

「ち、抽象的過ぎてわかんないよ、なにがあつたの篤」

「・・・ごめん」

なんでもない。

頭冷やしてくる。

一方的にそう言ったまま、その日啓上は帰らなかった。

*

「で」

どがん、と職員室の一角で打撃音が落雷した。

「どういうこと？」

朝一番。

まだ誰もいない職員室にたった二人、並々ならぬオーラが立ち上っていた。

「どうもこうもない」

「なかったらあの子は嗚咽紛れに電話なんてしてこない」

さあ話さない。

それが彼女のある種の脅しだった。

「俺が悪い」

「それで済ます気？」

「・・・一方的に俺が怒鳴った」

左手にあごを乗せる啓上。

「あんた、そんなに・・・湊川となんかあつたの？」

「観月はなにもなかったといった」

「あんたはあつたのって訊いてんのよ」

そのあと、しばらく黙っていたが、ついに啓上は切り出した。

「・・・湊川の奴」

「うん、それで？」

「観月のこと、呼び捨てで呼びやがった」

「はあ？」

気の抜けた声。

炭酸の抜けたサイダーのような感じ。

「別にそのくらいで・・・」

「それで抱きしめてやがった」

「・・・」

うわめんどくさい。

佐野は思った。

「それで？」

「・・・観月は、それを隠してやがる。それが嫌だ」

「・・・いい年こいてガキかあんたは」

「男はいつだってガキだ」

「屁理屈こねるな」

啓上の前ではいつも口調が荒い。

「・・・隠してるんじゃないと思うわ」

「んなわけねーだろ、仮にも女だし、隠さないわけ・・・」

そこで啓上の思考が止まった。

「・・・いや、マジで・・・え？」

「昔からあの子はそういう子じゃない」

「いや確かに、俺のときもそうだったけどまさか・・・」

「その辺の成長はあの子、多分三歳で止まってるわよ」

「・・・嘘だろ」

はー、と机に突っ伏す。

「完全に俺に非があるじゃねーか・・・」

「よくお分かりで。確かにあの子の鈍感さは犯罪級だけど」

「生徒の寝ボケであいつの脳内では処理されたっつーのか!？」

「そういうことよ」

けるっと言う。

「・・・観月に謝るところ・・・でも怒るところ」

「あら、また開き直り？」

「・・・男に抱きつかれたのは許せん」

遠くではよございまーす、と愛しい声が聞こえた。

堅物上司の突拍子のないこと甚だしい発言

地獄のテストは幕を下ろした。

「逢沢先生」

金曜のお昼。

一週間のいばら週間からの解放感でんこ盛りの陸上部。

逢沢は振り返った。

「ああ、天野^{あまの}」

「逢沢先生、兎田^{うさいだ}は」

「・・・とにかく今日は全員調整だけ。朝しか走ってないから、誰も無理はしないで。あと駿河^{するが}呼んで」
「はい」

駿河は最近かなり不調だ。

棒高跳びの兎田に至っては、もうすでにポールを飛び越え着地出来ないほど足は痛んでいる。

総体は諦める。

逢沢がテスト前に告げた言葉である。

毎年引退試合となる県総体。

それを諦めさせる。

今までの目標だった大会をやめろということは、今までの練習がすべて泡と消えたことを意味する。

言いたくなかった。

特に二年以上たった一人、棒高跳びで黙々と努力してきた兎田には、ただ、彼の返事はテスト明けまで待つと言った三秒後、返事は帰ってきた。

『嫌です』

やるんです。

脚が使い物にならなくなっても。

練習は加減します。

整骨院にも通います。

だから、

『総体に出させてください』

『壊してもいいというのは感心しないな』

どこかの誰かに似た口調。

『それでも俺は出たい』

その瞳。

誰かに似ていた。

『・・・テストが明けるまで、ストレッチとマッサージやるときなさい』

『当然です』

俺を誰だと思ってるんですか？

すごい決め台詞。

あの日逢沢は思った。

「お呼びですか」

「ああ、駿河」

走り幅跳びの駿河は同時にキャプテンも兼ねている。

そのプレッシャーによる不調ではないかと初めは思っていたが。

「昨日の朝練見てわかった。お前腰」

「痛くないです」

即答する。

「けどだな」

「兎田に俺の代わりに頑張れって言われたから痛くないです」

きっぱりと駿河は言い切った。

意地。

誰かはそう思うかもしれないが、きつと違う。

意地なんかじゃない。

仲間の思いを背負っているからこそ、言える言葉。
言いたい言葉。

言つべき言葉。

「さつき天野にも言ったけど、今日はあくまでも調整だから」

「はい」

「今壊したら出せないからね」

「はい」

逢沢は陸上部の顧問であり、啓上はサッカー部顧問。

啓上はグランドの反対側で、ジーツとその様子を見つめていた。

クラブのときはメイクをとり、日焼け止めを塗っているだけ。

その彼女が輝いて見えるのは、きっと愛してるからだとか柄にもないことを考えていた。

*

「観月」

ドアを開けた逢沢に、啓上が声をかけた。

「ただいま、ごめん、遅くなっちゃって」

帰ってきたのは十時を回ったところ。

家までは約二十分。

かなり遅くまで仕事していたことになる。

「いや、メシは？」

「先食べる。篤は食べた？」

「ああ。悪い」

「大丈夫」

「今日は酢豚」

「やったッ」

イエイ、と跳ねる。

「ずいぶん遅かったな」

んむんむと咀嚼する逢沢に、啓上はビールを飲みつつ訊く。

「あのね、採点は九時には終わってたんだけど、明日の晩の」

「ああ、佐野先生と行くなんちゃらってレストランか」

例の三好を撃滅したあの話である。

「そう。なんかそれで三好先生に意地悪したらしくて」

ほう、あの三好先生をか。

啓上はうなずく。

可哀想に。

「なんかね、いじめずにはいられないんだって」

うわあ教師にあつてはならない言葉。

「なんかお誘い受けたらしいんだけど、そのご飯が明日の晩だったらしいの」

でね、と続いた言葉にビールが詰まった。

「一緒に食べるのは嫌なのかなあ」

ゴブ。

変なところに入った。

気管か？

きやほきやほ、とどこかかん高い咳。

「ど、だ、大丈夫！？」

「あ、ああ」

なんだこいつ。

湊川のことといい、こいつ馬鹿だ！

「・・・観月」

「ななに！？」

背中叩こうか！？　と目を回している。

「いやそれはいいけど」

ぼん、と観月の両肩をに手をのせる。

「数学が三十二点だったのは許容範囲だ」

「えっそれって見くびられてるってこと！？」

っていうかいきなりなに！？

しかも数学のあれ知ってたの！？

まあある意味すべてイエスだが。

「お前と結婚するのは苦労しそうだな」

「しかもいきなりプロポーズ!？」

「なんだ、その気ないのか」

「そっそんなことないッ」

ダメだ。

啓上は思った。

柄にもないことを。

顔を真つ赤にさせたのは二人ともで、ただ赤い理由が羞恥なのか照れかはわからなかった。

*

「あっあの堅物が!？」

ローストビーフにナイフを突き刺したままというマナー違反もはなはだしい佐野が叫んだ。

ゆったりとした空気が流れるなかの大絶叫、マナー違反三割増し。

「そんな柄にもなくこっぱずかしいことを」

「だけど嬉しかったの」

「天変地異よ、槍が降るわ」

「ああっひどい」

ホントに幸せだったのよ、とハート飛ばしまくりの逢沢。

ああサムイ。

槍か雪か知らないけどなにかは降るわね。

佐野は内心呆れている。

「観月ちゃん」

プライベートでは、普通見知った教師相手ならさん付けて呼ぶ。

が、大学時代からの友人である彼女らは下の名前で呼びあっている。

「はい」

「あやつと、もう腹くくつたら？」

「せめてくつついたらとか他に表現方法ないんでしょうか」

「ナツシング」

この子ホントに可愛いわ。

普通照れてそんなことツとか言うでしょ。

突っ込みどころだいぶ間違えてるわよ逢沢ちゃん。

微笑ましいばかりの佐野。

そんな佐野もだいぶ屈折している。

しかし佐野は気付いていた。

それもまた啓上の屈折した愛情表現であり、彼の屈折した湊川への牽制でもあることを。

「ほら、観月ちゃん、食べちゃわないと愛が冷めちゃうわよ」

「愛をローストビーフにたとえないでください」

屈折には屈折を、か。

冷める冷めないじゃなくてローストビーフを引き合いに出したことに突っ込んだか。

ぶく、笑う佐野に、逢沢はふて腐れてローストビーフをかつ込んだ。

*

そして柄にもないことを言ったカタブツ男はといいますと。

ぶえつくしよいつ！

盛大にくしやみしていた。

自分で作った冷凍可能焼きそばメシを飛ばすまいと必死である。

「っだ、ふう」

二十九歳、すでにおっさんのくしやみである。

てるてるてる。

なんとも奇妙かつ不思議かつ不気味なコール音がざわめく。

音に連動するバイブレータが人混みにいるような感覚をかもし出し

ているので、ざわめくが正解である。

「ん、もしもし」

コール音で大体の検討がつくよう設定してある。

“もしもし”

澄んだ声。

「古都子か」

“ええ、ねえ篤、あんた観月ちゃんに”

「なんだ、結婚の意思は伝えたぞ」

相手の意向を最大限に汲み取って言葉を発した。

佐野は電話の向こうではあ、と盛大にため息し、

“柄にもなく生真面目なことを”

「それはなんだ、俺は毎日色ボケだって言いたいのか」

“近いものはあるわよね”

「近いものもなにもないぞ」

“隠しきれてないわよ、湊川への牽制”

「・・・うるせ」

やっぱバレてたのか。

啓上はばつが悪そうに頭をかく。

「でもいつものごとく」

“一切気付いてなかったわよ”

佐野の即答。

ある種のやるせない感が啓上を襲う。

「そもそも湊川に気付いてないんだよなああの天然記念物は」

“そうよ、あの国指定特別天然記念物鈍感絶滅危惧種はただのろけにしてるわよ”

「それはそれで嬉しいけど」

“だけど、校内ではなにも”

「言えないけど、それが観月への」

続かなかった。

なにも、口がきけなくなった。

“縛るの？”

そうかも知れなかった。

観月を、あいつの自由を、俺が。

“心配ないとはかなりの高確率でわかるけど”

「のろけにしているなら、いいけどな」

そうね。

佐野は微笑んだと思われる声で締めた。

*

「あ、古都子さん」

「たあだいま」

たん、とミニバックを置いた。

トイレで通話したのである。

「篤ですか？」

こういう勘は鋭いのになぜ牽制や湊川の気持ちに気づかないのか。

「そ、あんたのせいでのろけられたって言うてみた」

「ええッなんですかのろけなんてしてないですよ」

いやそういうのをのろけという。

「でも観月ちゃんが可愛かったから許す」

「それは喜ぶべきでしょうか」

さあね、と首を傾げてみた。

*

で？

そう切り出したのは湊川だった。

「なにが、で、なの？」

呆れたようにたんたんと机を叩くのは普段は逢沢の味方であるはずの綾瀬。

実際呆れている。

「俺、ミキティーを抱いた」

「語弊のある言い方をしないで」

純潔のミキティーをよくも、と続けているあたり、語弊というのは口先だけのようだ。

「ただ単に抱きついただけでしょ」

「うるさい」

ポカと小突く。

「叩くことないでしょ」

もうつと膨れっ面の綾瀬。

「ていうか早く一部始終を話してご覧なさーいッ」

ぐいつと詰め寄る綾瀬。

たじろぐ様子もない湊川。

「俺が最初マジで寝ぼけて抱きついた」

「で？」

さらに顔を寄せる。

「別に、そんだけッ」

「えーッ嘘嘘。ぜえったいエロエロ大魔神耕太はもうちょっとなかやっっちゃってるって」

うりゃつと肘鉄。

「してねーよ」

ほら、と湊川はうながす。

「早く帰れって。もう八時回るぞ」

うりゃつと今度は追い出した。

みなとがわこうた あやせわか
湊川耕太、綾瀬和歌の二人は幼馴染である。

特に家同士仲がよく、クラス全体を見てもほぼ幼馴染な中、ひときわ幼馴染歴が長い。

追い出された綾瀬は、ふう、とため息をついた。

「・・・ミキティーしか、見ないのかな」

勘違いは突然に

「テスト返すぞ」

ヒイツと教室の一部から悲鳴が上がった。

「勘弁してミキティー」

「あたしたちのためを思うならそれは燃やしてッ」

「ミキティー、テストなど破いてしまえホトトギス」

俳句作るなら覚悟を決める。

「はい、というわけで出席番号一番からこーい」

ガタガタとざわめきたち、あーだのいやーだの感情が波立つ。

週末明け、一時間目。

最初は英語だった。

嫌だなあと言いながら立ち上がるのは我らがナイチンゲール、保健委員。

一番は綾瀬だ。

「綾瀬、よくできてる。惜しいと言えばこの長文だな」

小声で説明する。

「でもいい。こっちの大問に引っかけからなかったのが」

「フオローありがとうミキティー」

えへ、とすりよられる。

「次、伊崎」

はーいと駆けてきた。

*

またこいつか。

佐野は心の中で悪態をついた。

「佐野先生には先日ほしてやられまして」

にこにこつとまんべんなく笑顔を振りまく三好。

「今晚」

「暇じゃないんですうごめんなさい」

「こちらにも負けじと笑顔を振りまく。」

「どうしてそんなにガード固いんです？」

「彼氏がいるからと申しておりますわ」

「逢沢先生ですか？」

「一気に意地悪い顔になる。」

「もう俺、その手には乗りませんけど」

「あんなの冗談に決まっていますわ。他にいますもの」

「うふふと微笑んでみせる。」

「だからその手には乗らないと」

「佐野先生」

「うっわタイミング悪ッ。」

「佐野先生、今暇ですか」

「んー、まあ暇かな？」

「夜の予定ですけど」

「その話を今するなややこしい。」

「純粹に話しかけてきた昔からの仲間、啓上に八つ当たり。」

「ああ、あとで電話して。授業でうら若き乙女たちが待ってるの」

「かきゆる、と教師用キヤスターチェアを引く。」

「え、佐野先せ……」

「あ、じゃあ先生、授業遅れないようにお気をつけて」

「え、さ」

「三好の言葉を最後まで聞かず、佐野は足早に（当社比三・七倍）走り去った。」

「いつまで逃げられるだろう。」

「それよりも、なによりも。」

「なにかから逃げているの？」

*

「小牧の兄さん」

うらつと後ろから声が聞こえ、気付いたときには束縛感があった。

「山脇」

んー、と嬉しそうに猫のように抱きつく小牧の副担クラス、1-C

の最後の出席番号を持つ山脇。

「大好きよ小牧の兄さん」

「ありがとう」

ポンポンと頭を優しく撫でる。

「大好き」

「うん」

また頭を撫でる。

そっぴい意味じゃないのに。

山脇は言っ。

「うん？」

うまきはぐらかしてみせる。

「小牧の兄さんひどい」

むう、と後ろ手にもわかるほどむくれる。

「はいはい、ほら、昼休憩終わるよ」

かろっじて束縛されていない左腕で、小牧を縛る腕に触れる。

「…はあい」

きゅ、と強く力をいれたあと、煙のように離れた。

「次は現国でしょう、梨華ちゃん」

ほらと背中を押してやると、えへへと微笑んだ。

そしていつも思っのである。

俺の事情も考えてもらわないと。

なにもしないなんて神にも誓えないんだから。

*

一方、誓う前にビビっている男はといいますと。
「始めるぞ」

バンツと荒く机に買い物かごか洗濯かご張りのでかいプラスチックかごを置く。

無論教卓の上である。

「きりーつれーいちゃくせーき」

とんとんリズム。

四分の四拍子。

「お前ら」

おおう。

喚声上がる。

歓声ではない。

「やりやがったな」

「どれを」

ふっと鼻で笑う。

「よくやった。逢沢先生が三十二点、佐野先生でも八十六点のテストを、平均点八十一・五出しやがったな」

その褒め方。

上から目線で偉そうなのに、なぜか嬉しい。

上司と呼ばれる由縁である。

単なる名前のもじりではない。

「ん、んん？」

お、こいつは気付いたな。

啓上は思った。

「逢沢先生？」

「ああ、やっていただいた」

「いやちがくて」

「それ以上は触れるな。はい返すぞー」

俺は触れたい。
何秒でも長く。
抱きしめたい。
抱きたい。
触っていたい。

三十も間近になって俺は馬鹿か？

たった一人の女を、この腕で抱くのも怖いとか。

*

言えたらいいのにな。

ベッドの中、少年は思った。

湊川である。

結局、テストを受けたのち、土日とプラスアルファで月曜もベッドにくくりつけられるようにダウンしていた。
逢いたい。

湊川の想いは止まらない。

*

「ただいま篤」

本日の逢沢も、帰宅がかなり遅い。

「おかえり観月」

声と共にガチャンと聞き覚えのある音。
びろり、となにかが開始する音。

また待たせた。

逢沢は深くため息。

「なんだ辛気くさい、なんかあったか」

ちろりん。

電子レンジである。

「うっん。ごめん、また待たせたの」

ががっとダイニングテーブルを引く。

「教師なんだ、多少はありえるだろこのくらい」

篤は優しい。

いつだって優しい。

「風呂か？」

「うっん、食べます」

タスン、と腰を落とす。

温かいご飯。

大好きな人が目の前にいる。

「いただきます」

チーズデミグラスソースのハンバーグ。

ポン酢ベースの即席ドレッシングの千切りサラダ。

用意されたのは二食。

篤は待つてくれていた。

何時に帰るか分からないあたしを。

十時を回って帰宅したあたしを。

「ご馳走さま」

はふ、と息をつく。

「にしても遅かったな」

カチャンとおかれたフォーク。

「うん。佐伯先生と相談してたの。ちょっと悪い噂があって」

「悪い、つつたらあれか」

「・・・変質者」

からんとグラスが鳴く。

「火曜日が多いの、出現率」

「高いんだろ、率は」

多いじゃなくて、とたしなめられる。

「うん・・・」

「で、それを？」

またまぐつとまだ残っていたサラダを頼張る啓上。

上目使いに訊いてくるのがなんとも可愛いと言つべきか。

「警備しようって話を」

「二人で？」

即座に切り返される。

「うん」

「馬鹿かッ！」

ガンツとビールを叩き置く。

「教師ツつたつてお前も女だぞ観月！ 自分からサービスしていく気か！？ なんの囀捜査だ？ 佐伯先生だつてベテランなんだからそのくらいの良識ぐらいあるはずだろ！」

しばらくポカンとしていた逢沢は、

「うん」

とあっさりうなずいた。

「ん？」

「そうだよ？ あるよ、良識。 二人で相談してたの、提案しようかって」

職員会議でね、言ってみようかって。

逢沢はにこにここと微笑む。

恋愛事には何事も疎い。

勘違いとはいえ、一瞬の啓上の心配には一切気付いていない。

疎すぎるだろ。

啓上は恥ずかしさと呆れのダブルパンチを食らった。

「・・・そういえば、お前明日日直か」

ちやかちやかと皿洗い中、スウェット姿で髪を拭いている啓上がビール缶片手に訊いてきた。

「うん。明日はもつと遅くなるかも」

「わかってる。俺も明日用事あるから学校残るし」

「そうなの？」

逢沢は不意を突かれた顔になる。

「ああ。成績個表の作成が追いつかなくなてな。家じゃ個人情報系は扱えんし」

「そっか。わかった。帰れたら一緒に帰ろ」

ね、と微笑んだ。

「ている、ている。」

「はいもしもし」

“ 佐野です ”

「あ、古都子さん。篤ですか？」

「うん。ちよつと相談したいの」

「はい、ちよつと待ってください。篤ー、古都子さん」

「あー、やっと来たか」

ほいほいと子機を取る。

「はい、俺だが」

“ 遅くなったわね。予約取れたわよ。ちゃんとあんた名義で取つといたから。領収書渡すからまた立て替えた分返してね ”

「おう、心配すんな。サンキュ」

“ あと五日、耐え忍んだらクラッカーよ。頑張つて ”

かなり一方的に、佐野の電話は切れた。

「佐野先生なんて？」

「一方的な事務連絡だ」

*

「さーてと」

受話器を置き、一方的な事務連絡をした佐野は堅物のことを考えて

いた。

「あのヘタレ」

はー、と白いソファに沈む。

「予約くらいなら私だって顔利くからやるけど、・・・あの馬鹿は」
は、と軽く嘆息。

「愛しすぎてエッチできないってどうなのよ、三十も間近になって」
ねー、と声をかける。

「あんなヘタレになんかなっちゃだめよ、水都^{みと}ちゃん」
ぶにっとな鼻をつつく。

「・・・私も寝るか」

もぞもぞと布団に潜り込んだ。

初デートの思い出

「おっはよーございまー」

すとならないのはやつ癖だ。

語尾は発音の関係で消えた。

「ああおはようございます。逢沢先生の机に安達がプリント置いてましたよ」

「あ、はい」

ふんふんとリズム豊かにスキップ。

そのまま白鳥の湖でも公演しそうな勢いである。

理由は、俺と古都子だけが知っている。

ことの発端はこの間の電話である。

『一方的な事務連絡ってなに？』

怪訝そうに目を向けられる。

『なんでもない』

フイと合わされた目を背ける。

『きーにーなーるー』

そんなキラキラした目をするな。

『きーにーなーるー』

ねえ、と迫り来る可愛らしい生物。

『事務連絡？』

ホントに？ と俺のガラスのハートをバットでかつ飛ばして打ち砕くような視線。

いや事務連絡というかまあいい感じのレストランの予約入れたって電話なんだが、とは言えず。

『この間、あいつに赤本借りてな。夏休みはワークじゃなくてそんな感じのプリントの宿題を三年に出すつもりで』

それで、とやつと目を合わせた。

『後期用の赤本は理科も入ってるからな、早く返せの一方的な連絡だよ』

つたく、とこれ見よがしにため息。

この様子をもし伝えられても、あいつなら機転きかせて話合わせるだろ。

ついでに古都子のせつかちがなおればいい。

『ふーん』

さも納得したような顔。

ただ口がハムスターなので恐らく俺を泳がす気だろう。

気付かれていると気付かないほど俺は鈍くない。

ただあとが厄介なので触れないでおく。

『俺あの赤本まだ使うから、お前先寝とけ』

『はあい』

普通の女ならムツとするところをこいつはあっけらかんと返事する。

だから吹っ切れない。

恋に疎いこいつはタイミングにも疎い。

下手するとそういうことすら知らないかもしれない。

怖すぎて訊いたことはないが。

『おやすみ』

『おやすみなさい』

ただ。

ただ譲れない。

SEXは我慢できてもおやすみ前のキスだけは！

俺が小さく頬に口づけてから、彼女は部屋に引き上げた。

カッコつけて額にしたいところだが、身長が届かなかった。

翌朝、借金取りは取り立てに来た。

『早く返しなさい。あのお金でホントは水都と遊園地に行く予定だったのよ！』

水都は怒らすと怖いんだから、と本気で怯えた顔。

『あんたらがあつついディナーしてる間私は水都とプリキュア観に行つてハンバーグ食べるんだから!』

半端なく楽しみなのよと気迫がオーラのように視界に映る。

怖いぞ古都子。

『早く返してね、私あの子とデートするんだからね』

『貯金家のお前なら金ぐらいあるだろ、そんな焦らんでも』

『せっかちなのよ』

威張るな。

『わかつてる』

クスクス笑う。

『早急に返す』

『当たり前でしょ』

そんな様子を見ていた小牧先生は、

『はは、仲いいですね』

取り立て屋と仲のいい客なんているのか。

『そうでしょ』

お前も返事するな古都子。

その時、チャイムがなった。

『始業だわ。逢沢先生』

『はい』

向こうでコピー機と格闘している。

ぱつと振り向いて古都子を見る観月はあまりにも純真無垢。

『ちよつといいですか』

『はい』

がしゅんとコピー機を開け、原本とサイドに積まれたコピーを抜き取る。

ばさりと机において、観月はこちらへ来た。

耳を寄せる観月に口を寄せる古都子。

『で』

『はい、ええ』

彼氏の前で内緒話か。
いい度胸だな古都子。

『じゃあ行きましようか逢沢センセ』

『はい佐野先生』

二人で微笑みながら職員室を出ていく。

『あの二人は付き合ってますかね』

どことなくげそつとしている三好。

信じてるのかあの話を。

本物の馬鹿野郎だなこいつ。

『いやそれはないだろう』

ていうかそうだったら俺の立場はどうなる。

俺は一つ息をついて教室を出た。

『佐野先生！』

すでに始業はなっているが、急いで引き留めた。

『はい』

くるりと理科室前の古都子が振り返った。

『うちの嫁を誘惑してくれるな』

至極迷惑だと顔に出す俺。

ふうむ嫁ですか、と片眉を上げる古都子。

『あたしには言えるのに本人には言えないのこの頑固ヘタレ』

『ヘタレ言っな。保守的と言え』

『言うかこのヘタレ』

あえて言うところが嫌な女だ。

『一個だけ聞いときなさい』

ぐいつとジャージの襟首を捕まれる。

ネクタイじゃなくてよかったと少し安堵する。

そのままあまりに冷ややかな態度で古都子は言い放った。

『あんまりウブがってたら私がキスのひとつも奪っちゃうから』

『肝に命じとく』

一瞬本気で背中がゾクツとして、俺が押し出したその声は震えていた。

そして来たる日曜日。

『ね、ねえ篤』

脳内毛糸玉状態の観月。

引きずるように彼女を連れて、俺は某レストランの前に立った。待つてよ、とフラフラする観月。

『なにになにどうしたの』

久しぶりのデートだが、いつものどこへ行くかという言葉もないまま、普段とは違う強引なやり口。

行き先を篤が訊くこともしない、観月に訊かれることも許さないといったふうな雰囲気。

篤と付き合い始めてからもその前から、例のない行動だった。

そんな有無を言わせぬ強い腕は、観月を掴んだまま店内に入った。

雰囲気はどうみてもイタリア系だが隣の客は明らかに好み焼きを食べている。

予約した啓上ですと伝えたと、ウェイトレスはくすりと笑った。

『承っております。どうぞこちらへ』

その瞬間、篤はムツとする。

『なにか』

ずいぶんご機嫌ナナメだ。

『いいえ、失礼致しました』

目の前にクエスチョンマークを浮かべながら、観月は前へと進んだ。

『…』

黙々とオマール貝とバジルのピュレがけパスタを巻いては口へ、巻いては口へを繰り返す篤。

そろそろ体の奥がむず痒くなってくる。

『あ、篤』

我慢できなくなり、ついに声をあげる。

『デートなんだから、そんなむっつりしないで』

ギヤーこれじゃ篤がむっつりスケベみたいじゃないッ！

言ってしまったからの心境は嵐吹き狂う北米大陸だった。

何故かいたたまれなくなり、うつむいてきのこソースのペンを見下ろす。

『まあ、それもそうか』

なにに納得したのか最後までわからなかったが、とにかく篤は落ちて着き払ってフォークを置いた。

『悪かった、お前の誕生日に』

『はっ？』

ペンネから顔をあげる。

『なにつて？』

聞き間違いかしらと目を丸くする。

訝しげにこつちを見る篤。

『・・・まさかとは思うがお前』

『今日何日？』

『・・・用意したこつちの身にもなれ』

くそーとパスタに向かって突っ伏す。

『どーしてくれんだ、お前覚悟してると思ってこのあとホテル取ってるぞ』

『ホホホテル！？』

明らかに動揺した観月になにか勘違いしたのか、篤は若干焦った様子で、

『プリンスホテルだ、嫌か』

『いいいい嫌ってなにが』

『・・・皆まで言わす気か』

ジト目でこちらを見る。

『・・・そうじゃなくて』

なにがそうじゃないのか自分でも動揺してわかっていなかったが、それでも観月はレストランではおおよそ言ってはならないことを口にした。

『処女だよっ』

『だーわかってるっ！ だから黙れ！』

『二十歳をとうに越えてまだ処女だよ！』

『黙れつつってんだろ！』

へにゃ、と眉を八の字に下げる。

『だ、だっ』

『だってもへちまもあるか』

はーと長い息をはいて、落ち着いた表情で篤は観月に向き直った。

『んなこたわかってるから訊いたんだろ。お前が大丈夫なのか』

『た、多分』

やっぱり知ってたのね、と少し眉を下げた。

『食ったら行くぞ。向こうのディナーは口にあわんから朝だけとつてある』

あっと思っただあとで、はいとだけうなずいて、再びペンネに向き合った。

嘘つき。

口にあわないなんて嘘でしょう。

ここが初めてデートしたレストランだって覚えてたんでしょう。

ここのオマール貝のオリーブオイルパスタ食べたことも。

あの日も強引だったね。

今日ほどではないけど。

あの時も緊張してたの？

今も緊張してる？

だけど、ねえ。

ねえ篤。

あなたとなら、安心できるのよ。

ピリオドを（前書き）

活動報告のままです。

ピリオドを

お久しぶりです蝶々です。

前回活動報告を書いたのが3/1、すでに二ヶ月たっております。

早いもんです。

変わりゆく人の心に

私もそのうちの一つなのでしょう。

先日、移転作業の全工程が完了しました。

特に図書館の移転作業なんて、校正もかねての移転だったので気が遠くなるような思いで…。

やっぱりドコにでも流行りはあるんだな、というのがこの一年なるうで書いて思ったことです。

前のサイトにもありました。

私は流行りに乗れない人間です。

音楽もファッションも、なんでもそうです。

自我が強いんでしょうか。

結局、自分のサイトを持つことで流行りという概念から離れられました。

ついったのふおろわさんたちから、また一緒に、創作のこととか色々学んだり、話したりしてます。

結局はかまってほしいというわがままから起因していたのかもしれないです。

今日でここの更新は無期限停止とします。

なろうアカウントもすべて残していきます。

お気に入りとかも外されてしまうかもしれないですが、仕方ないと思います。

先に書いたとおり、私のわがままから起因しているのでしょうか。

今後のHPの方針としましては、

- ・図書館で逢いましょう
- ・恋愛純度
- ・天然教師。

は移行後も引き続き連載

・鍵盤を奏でて
は移行後に完結

- ・STOP
- ・七日間の永遠を君と
- ・猫

は移行（なろうにて完結済み・ついでにHPにも移行済み）

その他、ここで掲載していなかった中編をいくつか載せていくつもりです。

ここにのみ残し、HPに掲載予定のないものは、

・図書館パーソナルデータ（最近ライブラリデータベースに改名して載せようかとも考えましたが別案が採用されましたので予定は立ってません）

・七日間シリーズ（単発で掲載した分）

・魔女の魔法（続かなくなってしまったのでまったく違うシリーズな話にしてHPにて掲載予定があります）

・蝶々のつれづれポエム（全作品を置いていくつもりです。現在は掲載予定はありませんが、もしかするとHPにシークレットページでも作って掲載するかもしれません）

そして最近、アルファポリス様のほうで配信させていただいており
ました「蝶々の気ままに短編。」というメルマガも無期限配信停止
となりました。

続行不可と判断しました。

近く「誰かに贈る一冊」も配信停止になる可能性が浮上しています。
HPやツイッタで似たようなことを続けていく可能性はありますが、
アルファポリスに顔を出すかどうかはもう結構怪しいです。

やりすぎると駄目、というのを身にしみて実感しました。

連載四つというやりすぎだけにとどめるよう善処を尽くします。

今までお付き合いくださいましてありがとうございました。

これからも蝶々は必ずどこかで書き続けます。

風が止むことはきつとないでしょう。

だからこそ私は書くのだと思います。

そう、七日間がすべての始まりだからでしょう。

彼女たちが教えてくれたことが、今の私を突き動かしている。

美穂や伊織が私をスターと地点に立たせ、

ポエムが私の胸を締め付けるような快感に突き落とす、

菊人や壱、千鶴たちが私の心に雨を降らし、

伽耶乃や雅生、昴たちが若き日々の足跡を思い出させ、

観月や篤が私を育て、

ぴあのや奏が新しい世界を切り開き、

釉生や陶真、季和が私を未来へといざなうのでしょうか。

書くことの幸せを、すべてにちりばめて。

ではこのあたりで筆を止めましょう。

この新天地が最後の移転先となることを信じて。

2
0
1
1
/
0
5
/
0
2
深夜
蝶々

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6347k/>

天然教師。

2011年9月5日16時27分発行